



伝えることから

学校法人松尾学園弘学館高等学校 2年 眞崎 由梨佳

「バンッ！」近くで巨大な花火が上がったかのような爆発音に思わず息をのむと同時に背筋に戦慄が走った。不発弾が炸裂した音だ。手の平サイズだが、すさまじい威力をもつ不発弾がラオスの地に未だに散らばっている。ベトナム戦争でラオスに投下されたクラスター爆弾は、2億6000万個、280万トン。一人約1トンの爆弾が投下されたことになる。そのうち約8000万個が不発弾として残され、今でも年間約50人が被害に遭い、4割が子どもたちであるという。訪問した UXO LAO の処理現場では危険と隣り合わせで手作業の地道な作業が行われていた。本気で向き合う国際支援の現場がそこにはあった。

私は「核兵器の廃絶と平和な世界の実現を目指す高校生一万人署名」のメンバーとして活動し、平和の大切さは分かっているつもりだった。しかし、私の認識はまだ甘いということを知った。衝撃だった。ラオスの人々にとって戦争はまだ終わっていない。人々の平和な暮らしのためには、すべての不発弾がラオスの地から消えなくてはならない。

ルアンパバーンこどもセンターで出会った女の子が、無邪気な笑顔で私に小さな折り紙のうさぎをくれた。自分の名前を記した“笑顔”のうさぎ。小さな手で私は彼女から大切なことを託されたと思う。伝えなくては。ラオスで私が自分の目を見て、耳で聞いて、肌で感じたことを。それが今の私にできることだ。微力だが、伝えることから始めたい。